

|               |              |     |       |
|---------------|--------------|-----|-------|
| 研 究 分 野       | 増養殖技術        | 部 名 | ほたて貝部 |
| 研 究 課 題 名     | 海面養殖業高度化事業   |     |       |
| 予 算 区 分       | 国補 (県1/2)    |     |       |
| 試験研究実施年度・研究期間 | H. 8 ~ H. 15 |     |       |
| 担 当           | 吉田 達         |     |       |
| 協 力 ・ 分 担 関 係 | 水産振興課        |     |       |

### 〈目的〉

県が策定し指導の基本としている「ホタテ養殖ごよみ」の養殖方法を基準に、大型貝生産を目的とした実証試験を行い、その結果を基に漁業者へ適正な養殖技術の啓蒙普及を図る。

### 〈試験研究方法〉

平成14年産貝を用いて、蓬田村漁協及び野辺地町漁協の区画漁業権内にある延縄式養殖施設を用いて試験を実施した。

蓬田地区は丸籠（平成15年3月24日分散の最善法、平成15年11月22日分散の次善法）、野辺地地区は丸籠（平成15年10月31日分散の次善法）と耳吊り（平成15年2月24日）で、連間隔（50cmと100cm間隔）による成長等の比較を行った。

### 〈結果の概要・要約〉

#### 1. 蓬田地区（図1-4）

最善法については、平成15年秋にサンプルが紛失したため測定できなかった。

次善法については、平成16年5月に測定を行い生残率・成長等を比較する予定。

#### 2. 野辺地地区（図5-8）

平成15年10月31日に耳吊り及び次善法用のパールネットの貝を測定した結果、生残率が耳吊り50cm間隔で58.3%、100cm間隔で58.2%、パールネットで47.2%といずれも極めて低かった。これは、平成15年春季に発生した微細粒子の衝突によるへい死が主原因と考えられた。

また、10月31日時点では、耳吊りの50cmと100cm間隔については、殻長が84.5mm、83.4mm、全重量が73.2g、70.2g、軟体部重量が28.9g、27.1gといずれの項目でも差が見られなかった。

耳吊り、次善法とも、平成16年5月に測定を行い、最終的な生残率・成長等を比較する予定。

### 〈主要成果の具体的なデータ〉

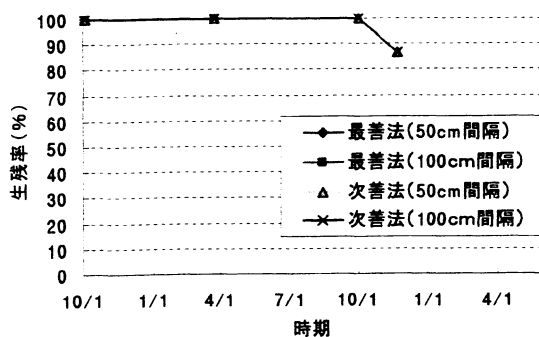


図1 累積生残率の推移

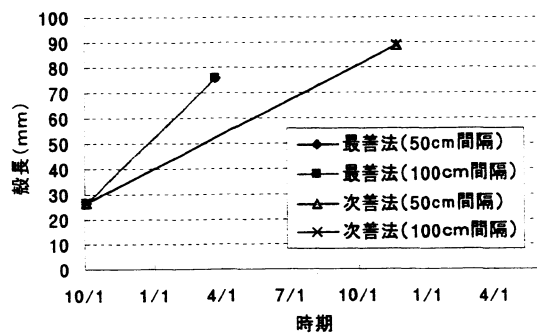


図2 殻長の推移

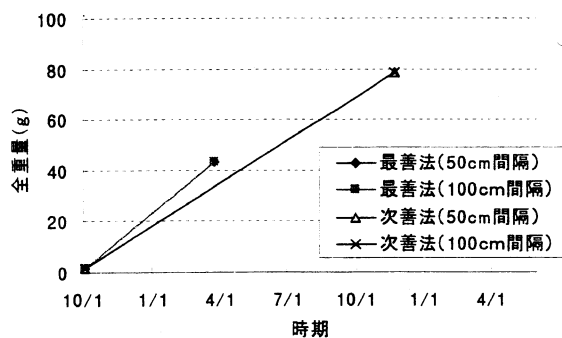


図3 全重量の推移

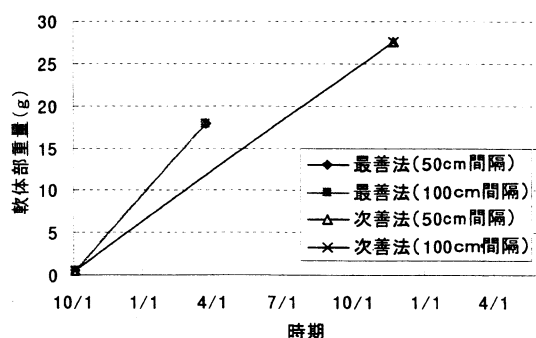


図4 軟体部重量の推移

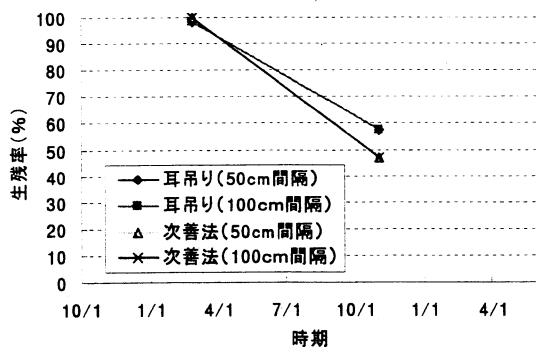


図5 累積生存率の推移

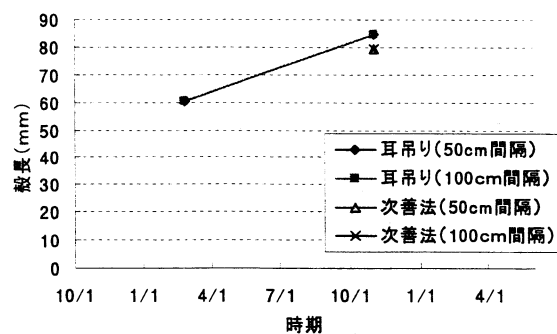


図6 殻長の推移

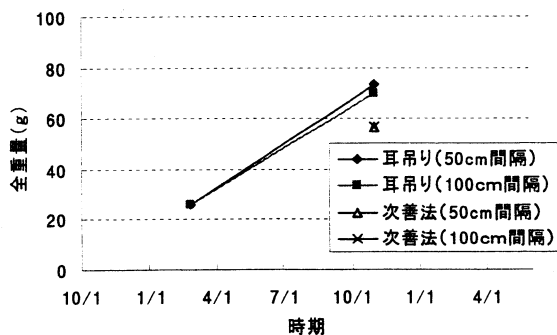


図7 全重量の推移

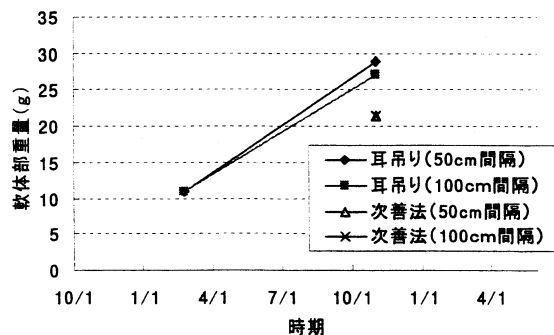


図8 軟体部重量の推移

### 〈今後の問題点〉

大型貝作りに関する実証試験は今年度で終了する。

### 〈次年度の具体的計画〉

養殖付着物（ユーレイボヤ等）に関する対策試験を行う。

### 〈結果の発表・活用状況等〉

全体協議会及び地域座談会にて、試験結果の報告を行った。